

ジンポー(カチン)語における動詞連続の文法化

倉部 慶太

1 はじめに

ジンポー語¹は、ビルマのカチン州やシャン州北部、中国の雲南省、東北インドなどで話されている、チベット・ビルマ系の言語である。ジンポー語はカチン語という名称でもよく知られている。本稿で扱うジンポー語は、主にビルマのカチン州ミッチーナで話されているジンポー語である²。本稿では、ジンポー語の動詞連続の文法化には、副詞化と補助動詞化、補文標識化の3つがあることを示し、それぞれ具体的に見ていく。また、特に副詞化と補文標識化については文法化の度合いを測ることも試みる³。

2 動詞連続

2.1 動詞連続の規定

本稿では、ジンポー語の動詞連続を(1)のように規定する。この規定のポイントを①から③に示す。

(1) 複数の動詞が動詞間の関係を示す標識を伴わずに同一節中に現れる現象

①動詞間の関係を示す標識が伴わない

次の文では、複数の動詞が現れているが、動詞間の関係を示す標識は現れていない。

(2) *sháhpa t̄am shá ai* (食べ物 探す 食べる VA) 「食べ物を探して食べた」(K2: 30)

②複数の動詞が同一節中に現れる

(2)の文が複数の節からなるのではなく単一の節であるということは、動詞接辞(VA)である *ai* がこの文に一度しか現れないことから分かる⁴。この他にも、否定辞 *ń-* や命令標識 *ùʔ*、疑問標識 *î*、名詞化・関係節化標識 *ai* なども動詞連続に一度しか現れない。このことから、ジンポー語の動詞連続はひとつの述語をなして、動詞連続を述語にもつ節は単一の節であると考えることができる。

¹ ジンポー語では正書法が確立している。正書法はおおむね音素表記であるが、声調、緊喉母音、声門閉鎖音などは正書法では表記されないため、以下ではそれらも付け加えて表記する。緊喉母音はアンダーラインで示す。母音(短母音): *i, e, a, aw[o], u, i, e, a, aw[o], u*。母音(二重母音): *wi[ui], oi, ai, au, wi[ui], oi, ai, au*。子音: *p, t, k, hp[p^h], ht[t^h], hk[k^h], ts[ts~s], s[s^h], chy[tʃ], sh[ʃ], m, n, ng[ŋ], l, r, w, y[j], ?*。原則として *p, t, k, ts, chy* は非緊喉母音の前ではそれぞれ *b, d, g, z, j* と表記される。声調: *má* 高平, *ma* 中平, *mà* 低下降, *m̄a* 高下降。

² 調査はビルマのヤンゴン(2009年8月、9月)、およびミッチーナ(2010年2月、3月)で行なった。

³ 本稿を執筆するにあたり、加藤昌彦先生、高橋慶治先生、総合地球環境学研究所の言語記述研究会の皆様から大変貴重なご教示をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

⁴ 動詞接辞は主にアスペクト的な意味を表し、主語や目的語の人称、数を表すこともある。

③複数の動詞から成る

ジンポー語の動詞連続を構成する動詞は、複数の動詞なのであって、複合動詞という単一の動詞なのではない。まず、次の例を見られたい。

- (3) gwì hpé? mawdaw hawn dùm jähkrit ai (犬 NS 車 警笛 鳴らす 脅かす VA)
「犬を車の警笛を鳴らして脅かした」(T123)

この文では、2つの動詞が各自の目的語をとっている。そして、どのような目的語を取るかということは、動詞によって決まっている。このようなことは複合語の場合には起こらないので、(3)の例文は複数の動詞からなっていると考えることができる。

以上、ジンポー語の動詞連続の規定について述べた。ジンポー語の動詞連続は、2つの動詞からなるものが最も基本的であるため、本稿では主に2つの動詞からなる動詞連続について見ていく。その際、先行する動詞をV1、後続する動詞をV2と呼ぶことにする。

2.2 動詞連続の意味

ジンポー語の動詞連続には、継起的な事象を表すもの(4)、V1がV2の動作の様態・方法を表すもの(5)、V1がV2の目的を表すもの(6)、V1が補文のようにになっているもの(7)がある。

- (4) gáp shá mà?ai (撃つ 食べる VA) 「撃って食べた」(K1:3)
(5) gáhtè shága gà?ai (ささやく 話す VA) 「ささやいて話した」(T277)
(6) jùm mări sa mà?ai (塩 買う 行く VA) 「塩を買いに行った」(K3:34)
(7) shäpre shá rà? ai (豆 食べる 好く VA) 「豆を食べるのが好きだ」(T22)

なお、(6)のようなV1がV2の目的を表す動詞連続におけるV2は、sa「行く、来る」やwà「帰る」のような、基本的な移動動詞に限られるようである。移動動詞であっても、様態の意味を含むhkawm「歩く」やgàt「走る」のような動詞では、やや不自然な文になる。hkawmやgàtのような動詞をV2に用いて目的を表す動詞連続を作りたい場合は、これらの動詞の後にsaやwàを置く方がよい。

ところで、次のようなV1とV2が同義・並列の関係にある例は、(1)で示した本稿での動詞連続の規定を満たしており、また動詞連続の研究においても動詞連続のひとつのタイプとされることがある。

- (8) lăgaw ni hpé? shămu shămàwt rà ai (足 PL NS 動かす 動かす 義務 VA)
「(泳ぐときは)足を動かさなければならない」(T238)

しかし、ジンポー語のこのような例は先に見た動詞連続の例とは次の点で異なる。①否定辞がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。②同一の副詞がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。③(同一の)名詞句がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。このような違いが

あるため、(8) のような例を動詞連続の例と同一視することはできない。本稿では、このような例は動詞連続ではなく、対句法 (parallelism) (加藤 2005) の例であると考え⁵。なお、ジンポー語の対句法の配列順序には音的要因が関与している。戴・徐 (1992) によると、対句法では、前に来る語の母音の高さは後に来る語の母音の高さよりも高いか、または両者の母音の高さは同じでなければならない (仮に規則 1 と呼ぶ)⁶。この規則は戴・徐 (1992) の示した例 (動詞の例は 29 例) に加え、筆者がニュースなどから集めた動詞の対句法 137 例のうちの 119 例にも当てはまる (「高一低」の順に並ぶ例が 72 例、母音の高さが同じ例が 47 例)。反例 (「低一高」の順に並ぶ例) は 18 例のみである。また、単音節語は多音節語よりも先に置かれるという規則 (仮に規則 2 と呼ぶ) を考えれば、反例のうち 7 例は説明できる⁷。このように対句法の配列順序には音的要因が関与するのだが、動詞連続の配列順序には音的要因は関与しないため、この観点から見ても対句法と動詞連続は区別する必要があるだろう。

2.3 動詞連続の否定

ここでは、ジンポー語の動詞連続を否定した場合、否定辞がどこに置かれるかを見ておく。

まず、継起的な事象を表す動詞連続 (9) と V1 が V2 の動作の様態・方法を表す動詞連続 (10) に否定辞を付加した場合、一般的に否定辞 *ń-* は V1 の直前に現れる⁸。否定辞は V1 と V2 の両方を否定する。

(9) *n sa shá ai* (NEG 行く 食べる VA) 「行って食べなかった」^{9 10}

(10) *ń mǎrǎwn shǎga ai* (NEG 叫ぶ 話す VA) 「叫んで話さなかった」

次に、V1 が V2 の目的を表す動詞連続では、否定辞は V2 の直前に付加される。

(11) *jùm mǎri n sa ai* (塩 買う NEG 行く VA) 「塩を買いに行かなかった」

⁵ 対句法は *couplets* (Hertz 1911: 26–27) などと呼ばれることもある。また、ジンポー語では *Gà Mǎrún* または *Gà Shǎgùp* などと呼ばれている (Maran 2004, Laika Uma 2009: 26–47, Labya 2009: 8–10)。

⁶ 詳しくは戴・徐 (1992: 398–408) を参照。また、規則 1 は戴・徐 (1992) が示す通り、名詞などの、他の品詞の対句法にも当てはまる。例えば、ジンポー語では「東西南北」は「東西北南」(*sinpráw? sinná? dǐngdung dǐngdǎ?*) の順序で配列されるのだが、この順序も規則 1 に従っているのである (p.400)。なお、ジンポー語のオノマトペの配列順序もこの規則に従っているように思われる。

⁷ 対句法のような例の配列に音的要因が関与しているということは、日本語や朝鮮語、満州語などにも見られる (早田 1977)。早田 (1977: 126–127, 130) では、ジンポー語の対句法の規則 1 や規則 2 で見たようなことは世界の言語に広く見られるのではないかと述べられている。また、この論文では、現代日本語について、成員の一方が漢語である場合、漢語は後に並べられる例が目につくと述べられているが (p.131)、戴・徐 (1992: 405) もジンポー語について同様の観察をしている。つまり、ジンポー語の対句法が借用語を含む場合、借用語は後に置かれる。今後はジンポー語の対句法についてさらに詳しく調べる必要がある。

⁸ 話者によっては、一般的ではないが、V2 の直前に否定辞を置いて理解はできるとすることもある。また、話者によっては、V2 の直前に否定辞を付加する方がよいとすることもある。

⁹ 否定辞 *ń-* は中平調の直前では変調して中平調で現れる。

¹⁰ 出典が明記されていない例文は作例である。以下、同様。

最後に、V1が補文のようにになっている動詞連続では、否定辞はV1に付加される場合とV2に付加される場合とがある。また、どちらに付加してもよい場合もある(12)(13)。このタイプの動詞連続における否定辞の位置は、話者によって判断が異なることもある。

(12) shǎpre ní shá shǎráwng ai (豆 NEG 食べる 好く VA) 「豆を食べるのが好きではない」

(13) shǎpre shá ní shǎráwng ai (豆 食べる NEG 好く VA) 「豆を食べるのが好きではない」

2.4 動詞連続の文法化

本稿では、Heine and Kuteva (2002: 2) にしたがって、文法化を「語彙的な形式の文法的な形式への発展」と考える。ジンポー語の動詞連続において、2つの動詞が連続したときに、一方の動詞が文法化するという現象がみられる。ジンポー語におけるこのような文法化には、V1の副詞化(4節)とV2の補助動詞化(5節)、V1の補文標識化(6節)の3つが見られる。

3 先行研究

Matisoff (1974) は、文法化については述べていないのであるが、本稿で扱うものと重なる部分を扱っていて、「動詞連続に比較的自由に現れる動詞」を *versatile verb* と呼んでいる。Matisoff (1974: 189) での *versatile verb* の規定は「他の動詞の前か後に、通例または特徴的に現れる動詞」となっている。また、Matisoff (1974) は *versatile verb* を2つのタイプに分類し、主動詞の前に現れるものを *adverbial verbs* (副詞的動詞)、主動詞の後に現れるものを *complementary verbs* (補助動詞) と呼んでいる。

4 副詞化

動詞の副詞化を見る前に、ジンポー語の副詞には否定辞を付加することはできないということを見ておく(14)。この文において、否定辞は動詞 shá「食べる」に付加しなければならない。

(14) *ní láw?láw? shá ai (NEG たくさん 食べる VA) 「たくさん食べなかった」

4.1 副詞化の例

ここでは、副詞化していないV1と副詞化したV1との違いを見る。次の文では、どれもV1の位置にある形式が意味的にV2を修飾していて、V1は副詞のように機能している。そして、これらのV1は、Matisoff(1974)ではすべて副詞的動詞として分類されている。

(15) hkàm shá (hkàm 食べる) 「耐えて食べる」(Matisoff 1974: 194)

(16) mǎrèn shá (mǎrèn 食べる) 「同様に食べる」

(17) bái shá (bái 食べる) 「また食べる」

これらの形式のうち hkàm と mǎrèn は単独で動詞として用いることができる(その場合の意味は、それぞれ「耐える」「同様だ」である)。単独で動詞であることは、否定辞や動詞接辞を付加すること

ができることから分かる。否定辞や動詞接辞は動詞にのみ付加できるからである。最後の *bái* は否定辞や動詞接辞を付加することができないため、動詞ではなく副詞であるのだが、本来は「繰り返す」という意味の動詞であったことが分かっている。これについては後述する。

さて、上の文に否定辞を付加すると、否定辞 *ń-* の位置に違いが出てくる。

(15)' *ń hkâm shá* 「耐えて食べない」¹¹

(16)' *mǎrèn ń shá* 「同様に食べない」

(17)' *bái ń shá* 「また食べない」

これらを見ると、(15)' の例では否定辞が V1 の直前に現れており、その他の例では否定辞が V2 の直前に現れている。また、次のようにこれらの否定辞の位置をそれぞれ入れ替えることはできない。

(18) **hkâm ń shá*

(19) **ń mǎrèn shá*

(20) **ń bái shá*

以上のように (15)' の例とその他の例では、否定辞の位置に違いがある。V1 の直前という (15)' の否定辞の位置は、2.3 で述べたように、V1 が V2 の動作の様態・方法を表す一般的な動詞連続に否定辞を付加したときの否定辞の位置と同様である。この事実から、本稿では (15) は 2.2 の (5) の例と同様に、V1 が V2 の動作の様態・方法を表すタイプの一般的な動詞連続であると考え、(15) の *hkâm* は動詞であるとする。Matisoff (1974) で副詞的動詞とされているもので、このタイプに属するものは他にもあり、それらは 4.2 に列挙する。

一方、(16) の *mǎrèn* は、*hkâm* と同様に単独で動詞として用いることができるが、V1 に置かれた場合は否定辞を前接することができない。このことは、一般的な V1 が V2 の動作の様態・方法を表す動詞連続には見られないことである。否定辞を前接できないことは 4 節の最初で述べた副詞の持つ特徴と同様である。この事実から、本稿では、V1 の位置にある *mǎrèn* は副詞化しているものとする。このタイプのものは、4.3 に列挙する。

最後に、(17) の *bái* について述べる。この形式は、筆者のインフォーマントによれば単独で否定辞や動詞接辞を付加することができないため、そもそも動詞であると見なすことはできない。ただし、かつては「繰り返す」という意味の動詞であったことが分かっている。最も古いジンポー語の辞書とされる Hanson (1906) では *bái* は動詞と記述されているのである。また、Matisoff (1974: 192) はビルマのジンポー語を扱ったものであるが、'to repeat' の訳を与えている。また、徐ほか (1983: 53) を見ると、中国のジンポー語では *bái* はいまでも動詞としても用いられていることが分かる。これらのことを考え合わせると、*bái* はもともとは動詞であったが、完全に副詞化してしまったものであると考えることができる。このタイプのものは、4.4 に列挙する。

¹¹ 低下降調の単語に否定辞を付加した場合、低下降調は高下降調に変調する。

以上述べてきたことから考えると、本小節の最初で取り上げた3つの形式は、(15)から(17)に行くに従って、文法化の度合いが増し、副詞に近づいているものと考えることができる。

4.2 hkàmと同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、(15)のhkàmと同様に否定辞の前接を許す。

[1] hkàp 「待ち伏せする」

(例) hkàp mù (hkàp 見る) 「待ち伏せして見る」 (Matisoff 1974: 193)

[2] lǎgyím 「こっそり行なう」

(例) lǎgyím yu (lǎgyím 見る) 「こっそり見る」 (Matisoff 1974: 194)

[3] mǎyún 「こっそり行なう」

(例) mǎyún yu (mǎyún 見る) 「こっそり見る」 (Matisoff 1974: 194)

[4] shǎyáwm ~ shìyáwm 「減らす」

(例) shìyáwm tsun (shìyáwm 言う) 「減らして言う」 (Matisoff 1974: 194)

[5] gǎjàwng 「驚く」

(例) gǎjàwng yu (gǎjàwng 見る) 「驚いて見る」 (Matisoff 1974: 195)

[6] lǎnyàn 「ゆっくりだ」

(例) lǎnyàn hkawm (lǎnyàn 歩く) 「ゆっくり歩く」 (Matisoff 1974: 195)

[7] jáwm 「協力する」。V1としては「みんなで」という意味を表す。

(例) jáwm hpai (jáwm 担ぐ) 「みんなで担ぐ」 (Matisoff 1974: 194)

[8] kām 「意志がある」。V1としては「ある動作をする意志がある」という意味を表す。この形式はV2の位置にも現れうるので、補助動詞と考えた方がよいかもしれない(5.4 [67]を参照)。

(例) kām hí (kām 読む) 「読む意志がある」 (KT)

[9] dāng 「勝つ」。V1としては「できる」という意味を表す。この形式はV2の位置にも現れうるので、補助動詞と考えた方がよいかもしれない(5.4 [68]を参照)。

(例) dāng tsun (dāng 言う) 「言うことができる」 (K2: 18)

4.3 mǎrèn と同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、V1 の位置に置かれたとき、否定辞を前接することができない。

[10] hkrák

「よく」という意味を表す。単独では「よい」という意味の動詞である。

(例) hkrák chyē (hkrák 知る) 「よく知っている」(KNG)

[11] nìngnan ~ ñnan

「新しく」という意味を表す。単独では「新しい」という意味の動詞である。

(例) ñnan paw (ñnan 現れる) 「新しく現れる」(KNG)

Matisoff(1974) では挙げられていないが、次の形式もこのタイプに属する。

[12] gǎja

「本当に」という意味を表す。単独では「よい」という意味の動詞である。

(例) gǎja shá (gǎja 食べる) 「本当に食べる」

[13] lǎwʔ

「さらに」という意味を表す。単独では「多い」という意味の動詞である。

(例) lǎwʔ shǎga (lǎwʔ 話す) 「さらに話す」

[14] lòi

「少し」という意味を表す。単独では「簡単だ」という意味の動詞である。

(例) lòi tsun (lòi 言う) 「少し言う」

[15] lau

「速く」という意味を表す。単独では「速い」という意味の動詞である。

(例) lau gǎlaw (lau 行なう) 「速く行なう」

4.4 bái と同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、(17) の bái と同様、筆者のインフォーマントによれば動詞ではないのだが、Hanson (1906) の記述からかつては動詞であったと考えられる形式である。以下に挙げる動詞の英語訳は Hanson (1906) による。

[16] grài

「とても」という意味を表す。動詞 grài ‘good’ に由来する。筆者が作ったコーパス (約 400 万語) では直後に動詞接辞が後接した grài ai や grài sai は見つからなかった¹²。Matisoff (1974: 189) には ‘be very’ の訳がある。徐ほか(1983: 200) では動詞としても記述されている¹³。

(例) grài mu (grài おいしい) 「とてもおいしい」(K2: 10)

[17] shawng

「先に、最初に」という意味を表す。動詞 shawng ‘to go or be first, ahead’ に由来する。コーパスでは shawng ai は 1 例、例が見つかった。徐ほか(1983: 800) では動詞としても記述されている。

(例) shawng mǎri (shawng 買う) 「先に買う」(KT)

[18] hkùm

禁止を表す。動詞 hkùm ‘to prohibit’ に由来する。コーパスでは hkùm ai は見つかった。Manam (1977: 405) には「動詞」とある。徐ほか(1983: 263) では副詞とのみ記述されている¹⁴。

(例) hkùm shākàwn (hkùm ほめる) 「ほめるな」(エ)

[19] ràu

「一緒に」という意味を表す。動詞 ràu ‘to be or act together’ に由来する。コーパスに ràu ai や ràu sai はない。徐ほか(1983: 687) では副詞とのみ記述されている。

(例) ràu sa (ràu 行く) 「一緒に行く」(エ)

[20] yép

「一緒に」という意味を表す。動詞 yép ‘to be close together, to adjoin’ に由来する。コーパスに yép ai や yép sai はない。徐ほか(1983: 892) では副詞とのみ記述されている。

(例) yép shá (yép 食べる) 「一緒に食べる」(Matisoff 1974: 194)

[21] tút

「いつも」という意味を表す。動詞 tút ‘to be joined’ に由来する。コーパスに tút ai や tút sai はない。徐ほか(1983: 850) では副詞とのみ記述されている。

(例) tút hkàmshá (tút 感じる) 「いつも感じる」(歌)

¹² 動詞接辞を付加できるならば、動詞であると見なせる。ai と sai は最もよく用いられる動詞接辞である。

¹³ 徐ほか(1983) では形容詞とされているが、ジンポー語では形態統語的に見て、形容詞と動詞を区別する必要はないと思われる。例えば、これらに付加される動詞接辞の形式は同様である。したがって、本稿では、徐ほか(1983) で形容詞と記述されているものを動詞として扱う。

¹⁴ hkùm+V2 は意味的な要因で否定辞 ñ- を付加することができないため、否定辞の位置を確かめることはできないが、この形式は本来は動詞であるが、共時的には動詞として用いることができないため、このグループに加えてよいと考えられる。

[22] hkrài

「ひとりで」という意味を表す。動詞 hkrài ‘to be alone’ に由来する。コーパスに hkrài ai や hkrài sai はない。徐ほか(1983: 248–249)では副詞とのみ記述されている。

(例) hkrài shá (hkrài 食べる) 「ひとりで食べる」(Matisoff 1974: 194)

Matisoff(1974)では挙げられていないが、grau もこのタイプに属する。

[23] grau

「さらに」という意味を表す。動詞 grau ‘to exalt, promote’ に由来する。コーパスやラジオ放送、歌では動詞としての例もいくつか見つかった。徐ほか(1983: 202)では動詞としても記述されている¹⁵。

(例) grau tsàwm (grau 美しい) 「さらに美しい」(K2: 19)

5 補助動詞化

本稿では、動詞の後ろに置かれて動詞を修飾し、単独の動詞としても用いられうるものを、仮に「補助動詞」と呼ぶことにする。

5.1 補助動詞化の例

ここでは、補助動詞化した動詞の例を挙げる。まず次の例を見られたい。

(21) hpa gǎlaw taw ai ta (何 する taw VA 疑問) 「何をしていますか」(チ)

この文において、V2 の位置にある taw は、<継続>の意味を表している。この形式は、単独で動詞として用いることもできる(その場合の意味は、「横たわる、位置する、ある」である)。単独で動詞であることは、この形式を単独で用いたとき、否定辞や動詞接辞を付加することができることから分かる。(21) の文では、taw が gǎlaw 「する」を意味的に後ろから修飾していて、補助動詞として用いられている。このような補助動詞は、動詞連続の V2 が文法化して発展したものであると考えられる。ただし、前節で見たような副詞化した動詞の場合とは異なり、この(21)の例の taw が動詞としての特徴を失っているということをはっきりと示すような文法的な証拠は現段階では見つかっていない。とはいうものの、(21) の taw は、もとの意味を失っており、また<継続>の意味では単独では用いることができないので、ある程度は文法化していると考えてよいと思われる。したがって、本稿ではこのようなものを補助動詞として記述することにする。

¹⁵ exceed のような意味の動詞が、比較級的な意味を表すために用いられるということは、世界の言語でよく見られることである(Heine and Kuteva 2002: 123–126, Aikhenvald 2006: 27)。

5.2 補助動詞

ここでは、補助動詞を具体的に記述し、例を示す。以下に挙げる補助動詞のいくつかは Matisoff (1974) でもリストされているのだが、そこでの意味の記述はあまり詳しくないので、本稿では意味の記述を詳しくした。また、本稿で筆者が新たに加えた形式は 14 ある ([25] [28] [29] [30] [31] [32] [37] [42] [46] [49] [50] [52] [57] [58])。なお、Matisoff (1974) では、意味の変化が認められず、したがって補助動詞とは認められないような例も挙がっている。それらの例は、本稿では補助動詞とは考えず、ここでの記述から外すことにする。また、Matisoff (1974) の挙げている例で、筆者のインフォーマントがそのような意味はないとしたものや、動詞に由来するとはいえないものも、以下の記述から除外してある。以下の記述では、補助動詞を主に意味的な観点から分類して示すが、これは便宜的な分類である。

5.2.1 ボイス

[24] shǎngún <使役>

使役を表す。V1 が動作動詞のときは被使役者に指示してさせるという意味を表し (例 1)、V1 が状態動詞のときは被使役者のある状態になるようにするという意味を表す (例 2)。(例 3) のように許容的な使役も表すこともできる。動詞 shǎngún 「遣わす」に由来する¹⁶。

(例 1) gǎlaw shǎngún (する shǎngún) 「(畑仕事を) させる」(KT)

(例 2) gǎbu shǎngún (喜ぶ shǎngún) 「喜ばせる」(T189)

(例 3) n h̄tēnzà shǎngún mǎyu (NEG 壊れる shǎngún したい) 「(土地を) 壊れさせたくない」(MYU7:3)

[25] jaw? <受益>

利益・恩恵を与えることや (例 1)、損・不利益を与えることを表す (例 2)。動詞 jaw? 「与える」に由来する¹⁷。jaw? は V1 の位置に来ることもある (5.4 [74] を参照)。

(例 1) gǎlaw jaw? (する jaw?) 「してあげる」(K2:40)

(例 2) hkà? hkànù? jaw? (水 汚す jaw?) 「(なぜ) 水を汚してくれる (のか)」

¹⁶ Maran and Clifton (1976) は shǎngún を接尾辞と見ており、これをもとに Dixon (2000: 68, 75–77) も shǎngún を接尾辞と見て、ジンポー語を直接使役と間接使役をともに形態的な方法で表すタイプの言語として分類している。しかし、shǎngún は接尾辞ではない。例えば次の文では、shǎngún は shǎkùt 「努力する」と ram 「十分だ」の両方の動詞を修飾しているが、shǎkùt と shǎngún は形態的に隣接しておらず、離れた位置にあるため、shǎngún を接尾辞と考えることはできない。したがって、Dixon (2000) の分類法では、むしろジンポー語は直接使役を形態的方法で表し (接頭辞 shǎ-)、間接使役を複雑述語で表す (補助動詞 shǎngún) タイプの言語に分類されると考えられる。

(例) mà yán lǎhkāwng hpé? jawng lǎika shǎkùt, lǎika ram shǎngún mǎyu ai
子 両 二 NS 学校 勉強 努力する 勉強 十分だ shǎngún したい VA
「子ども 2 人に学校の勉強を努力させ、勉強を十分にさせたい」(KNG)

¹⁷ 「与える」という意味の動詞が、受益や使役を表すために用いられるということは、東南アジアの言語ではしばしば見られることである (Matisoff 1991: 427–431)。

[26] ya<受益>

利益・恩恵を与えることや(例1)、損・不利益を与えることを表す(例2)。動詞 ya「与える」に由来する。ya は斜格項を目的語項にする機能があるため、アプリカティブであると考えられる(例3)(例4)。ただし、話者によっては(例4)のような文は認めにくいとすることもある。なお、jãw? との違いは jãw? が口語で用いられるのに対して、ya が文語で用いられることが多いということのようである。また、ya は jãw? と異なり、V1 の位置に置くことはできない。なお、V+ jãw? ya の形で用いられることもある(例5)。jãw? ya は対句法であるが、その順序は 2.2 で見た対句法の配列規則 1 に従っている。

(例1) mǎdāt ya (聞く ya) 「聞いてあげる」(映)

(例2) hkà? hkanù? ya (水 汚す ya) 「(なぜ)水を汚してくれる(のか)」(K2: 15)

(例3) ngai nang ná mǎtǔ gǎbu ai (私 あなた 属格 ために 喜ぶ VA) 「私はあなたのために喜んだ」

(例4) ngai nang hpé? gǎbu ya ai (私 あなた NS 喜ぶ ya VA) 「私はあなたのために喜んでやった」

(例5) gǎrum jãw? ya (助ける jãw? ya) 「助けてあげる」(コ)

[27] láwm<共同>

「一緒にする」という意味を表す。動詞 láwm「参加する、含まれる、備わる」に由来する。láwm は斜格項を目的語項にする機能があるため、アプリカティブであると考えられる(例2)(例3)。ただし、話者によっては(例3)のような文は認めにくいとすることもある。

(例1) gǎsát láwm (戦う láwm) 「一緒に戦う」(MYU6: 35)

(例2) gǎnù gǎw mà htè? yúp ai (母 主題 子 共格 寝る VA) 「母は子と寝た」

(例3) gǎnù gǎw mà hpé? yúp láwm ai (母 主題 子 NS 寝る láwm VA) 「母は子と一緒に寝た」

[28] hkrúm<受け身>

受け身を表す。被害を受ける場合(例1)と恩恵を受ける場合(例2)とがある。また、持ち主の受け身文のような例もある(例3)。この形式は自動詞の後に置くこともできる(例4)(例5)。V1 に状態動詞が来ると「～になる」というような意味を表す(例5)。動詞 hkrúm「会う」に由来する。

(例1) gwì gǎwá hkrúm (犬 噛む hkrúm) 「犬に噛まれる」(エ)

(例2) shǎgrau hkrúm (ほめる hkrúm) 「ほめられる」(KNO)

(例3) ngai gǎw baw gǎyàt hkrúm (私 主題 頭 殴る hkrúm) 「私は頭を殴られた」

(例4) mǎshà lǎw?lǎw? si hkrúm (人 たくさん 死ぬ hkrúm) 「人がたくさん死んだ」(KNO)

(例5) kǎw?si hkrúm (空腹だ hkrúm) 「空腹になる」(K2: 67)

[29] gǎtút<受け身>

受け身を表す。hkrúm との違いは、gǎtút が「突然に受けた」という含みを持つのに対して、hkrúm はそのような含みを持たないということである。動詞 gǎtút「予期せず会う」に由来する。なお、gǎtút

は、状態動詞には付加できないようである (例 2)。また、V+hkrúm gătüt の形で用いられることもある (例 3)。hkrúm gătüt は対句法であるが、その順序は 2.2 で見た対句法の配列規則 2 に従っている。

(例 1) gwì gǎwá gătüt (犬 噛む gătüt) 「犬に噛まれる」(エ)

(例 2) *kǎw?si gătüt (空腹だ gătüt)

(例 3) gwì gǎwá hkrúm gătüt (犬 噛む hkrúm gătüt) 「犬に噛まれる」

[30] hkàm<受け身>

自ら進んで行為を受けるという意味を表す。動詞 hkàm 「受ける、耐える」に由来する。

(例) gwì gǎwá hkàm (犬 噛む hkàm) 「自ら進んで犬に噛まれる」

5.2.2 アスペクト

[31] taw<継続>

動作の継続や (例 1)、結果状態の継続を表す (例 2)。また、状態や (例 3)、反復・習慣も表す (例 4)。

動詞 taw 「横たわる、位置する、ある」に由来する。

(例 1) shǎchyút taw (追いかける taw) 「追いかけている」(映)

(例 2) dù taw (着く taw) 「着いている」(チ)

(例 3) kǎw?si taw (空腹だ taw) 「お腹が減っている」(エ)

(例 4) gǎlaw taw (する taw) 「(学生ではなく今は)仕事をしている」(チ)

[32] ngà<継続>

動作の継続 (例 1) や結果状態の継続を表す。また、状態や反復・習慣も表す。動詞 ngà 「いる、ある」に由来する。taw との違いは、taw は口語で用いられることが多いのに対して、ngà は文語で用いられることが多いということのようである。また、V+taw ngà の形で用いられることもある (例 2)。

taw ngà は対句法であるが、その順序は対句法の配列規則 1 に従っている。

(例 1) hkràp ngà (泣く ngà) 「泣いている」(歌)

(例 2) là taw ngà (待つ taw ngà) 「待っている」(チ)

[33] dá<結果保持>

結果の保持を表す (例 1)。また、「着る」などの動詞の後では結果状態の継続を表す (例 2)。動詞 dá 「置く」に由来する。

(例 1) gǎlaw dá (作る dá) 「作っておく」(K2: 76)

(例 2) chyáwp dá (かぶる dá) 「(帽子を)かぶっている」(T47)

[34] tawn<結果保持>

結果の保持を表す。動詞 tawn 「置く」に由来する。dá との違いはまだ分からない。なお、V+tawn dá の形もよく用いられる (例 2)。tawn dá は対句法だが、その順序は対句法の配列規則 1 に従っている。

(例 1) bang tawn (入れる tawn) 「入れておく」(K3: 8)

(例 2) shǎdu tawn dá (料理する tawn dá) 「料理しておく」(K3: 8)

[35] má?<完全さ>

「～し尽くす」「ことごとく～」という意味を表す。動詞 má? 「終わる」に由来する。

(例) shá má? (食べる má?) 「食べ尽くす」

(例) hkyeng má? (赤い má?) 「ことごとく赤くなる」

[36] màt<完了>

動作が完了することを表す。「～してしまう」。動詞 màt 「なくなる」に由来する。

(例) hprawng màt (逃げる màt) 「逃げてしまう」(K2: 36)

[37] byin<実現>

動作が実現することを表す。「～しおおせる」。動詞 byin 「起こる、なる」に由来する。

(例) sa byin (行く byin) 「行く」

[38] lai<現在時への移動>

lai wà sai (lai wà VA) 「過ぎ去った」の形で現在時への移動や (例 1)、過去を表す (例 2)。動詞 lai 「通り過ぎる」に由来する。wà については[51]を参照。

(例 1) gǎja lai wà sai (よい lai wà sai) 「よくあり続けてきた(親友)」(映)

(例 2) gǎlaw lai wà sai (行なう lai wà sai) 「(4回目の会議を)行なった」(KT)

[39] hpang<開始>

開始の局面を表す。動詞 hpang 「始める」に由来する。

(例) Mǎnàu nau hpang (マナウ 踊る hpang) 「マナウの踊りを踊り始める」(KNG)

[40] ngút<終了>

終了の局面を表す。動詞 ngút 「終わる」に由来する。次の文はジンポー語のあいさつ。

(例) shàt shá ngút sai î (ご飯 食べる ngút VA 疑問) 「ご飯を食べ終わりましたか」(エ)

5.2.3 モダリティ

[41] rà<義務>

義務を表す。動詞 rà 「必要である」に由来する。なお、rà は V2 に来たとき否定辞が rà の直前に現れることもあるという点で特殊である (例 2)。動詞+補助動詞では、否定辞は V1 の直前に付加されるのがふつうである。

(例 1) jàw? rà (与える rà) 「与えなければならない」(エ)

(例 2) hkìt tsàng í rà (恐れる 心配する NEG rà) 「恐れ心配する必要はない」(MYU2:4)

[42] ging<当為>

当為を表す。動詞 ging 「価値がある」に由来する。

(例) tai ging (なる ging) 「(女王に)なるべきだ」(K2:46)

[43] mai<許可>

許可「～してもよい」や (例 1)、評価「～するのがよい」を表す (例 2)。また、可能や (例 3)、当為を表す (例 4)。動詞 mai 「よい」に由来する。mai は V1 の位置に来ることもある (5.4 [73] を参照)。なお、mai は V2 に来たとき否定辞が mai の直前に現れることもあるという点で特殊である (例 3)。また、否定辞が V1 の直前と mai の直前の両方に置かれることもあるという点でも特殊である (例 5)。

(例 1) shàng mai (入る mai) 「入ってよい(か)」

(例 2) rawng mai (持つ mai) 「(愛する心を)持つのがよい」(K2:14)

(例 3) hkawm n mai wà (歩く NEG mai なる) 「歩けなくなる」(KNG)

(例 4) hkìt mai (恐れる mai) 「(ヤマアラシは)恐れるべきだ」(K2:57)

(例 5) n sa n mai (NEG 行く NEG mai) 「行かないといけない」(KNG)

[44] hkráw<意志>

意志を表す。「快く～する」。動詞 hkráw 「同意する」に由来する。

(例) ya hkráw (与える hkráw) 「快く与える」(K1:15)

5.2.4 態度

[45] gwi<勇敢さ>

勇敢さを表す。「～する勇気がある」。動詞 gwi 「勇気がある」に由来する。gwi は V1 の位置に来ることもある (5.4 [70] を参照)。

(例) pru gwi (出る gwi) 「出る勇気がある」(K2:17)

[46] wam<勇敢さ>

勇敢さを表す。「～する勇気がある」。動詞 wam「勇気がある」に由来する。wam は V1 の位置に来ることもある (5.4 [69] を参照)。gwi との違いはまだ分からない。

(例) shá wam (食べる wam) 「食べる勇気がある」

[47] mäsù?<振り>

「～のふりををする」という意味を表す。動詞 mäsù?「だます」に由来する。

(例) si mäsù? (死ぬ mäsù?) 「死んだふりををする」 (K2: 27)

5.2.5 もくろみ

[48] yu<試行>

試行を表す (例 1)。また、経験したことがあるという意味も表す (例 2) (例 3)。また、思考・知覚動詞の後に置かれることもある (例 4)。動詞 yu「見る」に由来する。

(例 1) sèp yu (剥く yu) 「(ココヤシの実の皮を) 剥いてみる」 (K1: 20)

(例 2) mù yu (見る yu) 「見たことがある」 (K1: 19)

(例 3) n mächyí? yu (NEG 痛い yu) 「(それ以来足が) 痛くなったことはない」 (K1: 28)

(例 4) hkámshá yu (感じる yu) 「(心臓がどきどきしていると) 感じる」 (T192)

[49] dán<提示>

提示を表す。動詞 dán「見せる」に由来する。

(例) tsun dán (言う dán) 「言ってみせる」 (K2: 10)

5.2.6 移動

[50] hkawm<移動>

あちこち移動することを表す。動詞 hkawm「歩く」に由来する。

(例) pyen hkawm (飛ぶ hkawm) 「あちこち飛んでまわる」 (K3: 8)

[51] wà<移動>

移動することを表す。移動する方向は関係ない (例 1) (例 2)。また、物事が発生することや (例 3)、状態変化を表す (例 4)。「～しようとする」という意味も表す (例 5)。動詞 wà「帰る」に由来する。

(例 1) shàng wà (入る wà) 「(私) が家にいるとき彼らが(家) に入って来る」

(例 2) prū wà (出る wà) 「(私) と共に家にいるとき彼らが(家) から出て行く」

(例 3) byin wà (起こる wà) 「起こる」 (KNG)

(例 4) mai wà (よい wà) 「よくなって来る」 (K2: 18)

(例 5) sàt wà (殺す wà) 「殺そうとする」 (Matisoff 1974: 196)

[52] hkràt<下方移動>

下方へ移動することを表す。動詞 hkràt「落ちる」に由来する。

(例) lwi hkràt (流れる hkràt) 「(川上から水が)流れる」(K2: 17)

5.2.7 強意

[53] káu<徹底>

徹底を表す。「きちんと〜」。動詞 káu「棄てる」に由来する。

(例) lù káu (得る káu) 「きちんと得る」(コ)

[54] ðat<徹底>

徹底を表す。「きちんと〜」。動詞 ðat「放つ」に由来する。káuとの違いはまだ分からない。また、V+káu ðatという形も用いられる(例2)。káu ðatは対句法であるが、その順序は対句法の配列規則1に従っている。

(例1) shǎgá ðat (呼ぶ ðat) 「はっきり呼ぶ」(T10)

(例2) nà káu ðat (聞こえる káu ðat) 「はっきり聞こえる」(T5)

[55] jàt<付加>

「もっと」という意味を表す。動詞 jàt「加える」に由来する。

(例) gǎlù jàt (長い jàt) 「もっと長くなる」(K1: 36)

[56] bù?<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 bù?「熱がある」に由来する。

(例) mǎsìn pàwt bù? (心 怒る bù?) 「ひどく怒る」(K1: 40)

[57] si<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 si「死ぬ」に由来する。

(例) pyaw si (楽しい si) 「とても楽しい」

[58] sàt<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 sàt「殺す」に由来する。この形式は、話者によっては用いられないこともある。

(例) shǎpyaw sàt (楽しませる sàt) 「とても楽しませる」

[59] dik<甚だしさ>

「極めて」や(例1)、「最も～」という意味を表す(例2)(例3)。動詞 dik 「満ちる」に由来する。

(例1) pyaw dik (楽しい dik) 「極めて楽しい」(Hanson 1906: 113)

(例2) ?ähkyäk dik (重要だ dik) 「(全ての中で)最も重要である」(KNG)

(例3) námbát 2 gǎbà dik (数2 大きい dik) 「2番目に大きい」(KNG)

[60] htùm<最上>

「最も～」という意味を表す。動詞 htùm 「終わる、なくなる」に由来する。なお、htùm は V1 の位置にも来うる可能性がある (5.4 [75] を参照)。また、V+dik htùm という形も用いられる (例2)。dik htùm は対句法であるが、その順序は対句法の配列規則1に従っている。

(例1) tsàwm htùm (美しい htùm) 「最も美しい」(K2: 19)

(例2) pyaw dik htùm (楽しい dik htùm) 「最も楽しい」(歌)

5.2.8 その他

[61] chye<性質>

人間の性質・習性や(例1)、物の性質を表す(例2)。また、能力や(例3)、可能性を表す(例4)。動詞 chye 「知る」に由来する。なお、chye は V1 の位置に来ることもある (5.4 [71] を参照)。chye は V2 に来たとき否定辞が chye の直前に現れることもあるという点で特殊である(例3)。

(例1) pyaw chye (楽しい chye) 「(この人は)楽しい」(T133)

(例2) lāwm chye (備わる chye) 「(シャツには袖が)付いている」(T215)

(例3) hpùngyàwt n chye (泳ぐ NEG chye) 「泳げない」(Hertz 1895: 15)

(例4) byìn wà chye (起こる 来る chye) 「起こるかもしれない」(KNG)

[62] lù<状況可能>

状況可能(例1)、ものの性質(例2)などを表す。知覚・感覚動詞の後に来ることもある(例3)。動詞 lù 「得る」に由来する。なお、lù は V1 の位置に来ることもある(例1)(5.4 [72] を参照)。lù は V2 のとき否定辞が lù の直前に現れることがある点で特殊である(例4)。

(例1) ń lù lù? (NEG lù 飲む) 「(熱いから)飲むことができない」(T226)

(例2) hkrù lù (燃える lù) 「(草葺の家は火がつくとはやく)燃える」(K2: 32)

(例3) hkàmshá lù (感じる lù) 「(頬に雨が当たるのを)感じる」(T47)

(例4) shǎmu shǎmàwt ń lù (動く 動く NEG lù) 「動くことができない」(K2: 70)

[63] hkrùp<不注意>

うっかりやったことを表す。動詞 hkrùp「ぶつかる」に由来する。Matisoff (1974) では、状態動詞の後に置かれる例も挙げられているが、筆者のインフォーマントによるとこのような例は容認されない。

(例) hkrúm hkrùp (会う hkrùp) 「うっかり会ってしまう」(K2: 58)

(例) *chyang hkrùp (黒い hkrùp) 「たまたま黒い」(Matisoff 1974: 200)

[64] lá<取得>

「～して取る」という意味を表す。動詞 lá「取る」に由来する。

(例) shárin lá (勉強する lá) 「学習する」

5.3 完全に補助動詞化（助動詞化）した動詞

次の形式は、Hanson (1906) では動詞と記述されていて、もともとは動詞であったと思われるのだが、筆者のインフォーマントによると単独で用いることはできないという。したがって、これらは共時的には動詞ではないということになる。これらはもともと動詞であったけれども、完全に補助動詞（助動詞）になりきってしまったものと考えられる¹⁸。以下に挙げる動詞の英語訳は Hanson (1906) による。

[65] hkát<相互>

相互を表す。動詞 hkát ‘to dispute’ に由来する。徐ほか (1983: 237) では古い意味として「戦う」という意味があると記述されている。Hertz (1911: 40) には動詞としての例が挙がっている。また、Lungjung (2002) では動詞としても記述されている。

(例) tsáwʔràʔ hkát (愛する hkát) 「お互いに愛し合う」(K2: 34)

[66] măyu<願望>

願望を表す。動詞 măyu ‘to wish’ に由来する。徐ほか (1983: 516) では動詞とは記述されていない。ただし、戴・徐 (1992: 160) では動詞とも記述されている。

(例) sa măyu (行く măyu) 「行きたい」(エ)

5.4 V1としてもV2としても用いるもの

次の形式は、本来の動詞の意味が変わっていて、補助動詞などとして扱われると思われるものがあるが、V1の位置にもV2の位置にも現れるという点で特殊である。Matisoff (1974) では、これらがV1の位置にもV2の位置にも現れうるということは述べられていない。

¹⁸ 本稿では補助動詞は動詞としても用いられうるものとしたので、もはや動詞としては用いられないここでの形式を補助動詞と呼ぶのは正確でない。本稿では補助動詞と区別して助動詞と呼ぶ方がよいかもしれない。

[67] kam<意志> (=4.2[8])

「ある動作をする意志がある」という意味を表す。動詞 kam 「意志がある」に由来する。Matisoff (1974) では、副詞的動詞とされている。確かに V1 の位置に来ることが多いのであるが、V2 の位置に来ることもあるようである。筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようであるが、V2 に来た方が文語的であるとする話者もいる。

(例 1) kam shāga (kam 話す) 「話す意志がある」(チ)

(例 2) shāga kam (話す kam) 「話す意志がある」

[68] dang<可能> (=4.2[9])

可能を表す。動詞 dang 「勝つ」に由来する。Matisoff (1974) では、副詞的動詞とされている。確かに V1 の位置に来ることが多い。実のところ、筆者のインフォーマントによると V2 の位置に置くことはできない。ただし、Hertz (1895: 7, 18) や Hertz (1911: 19) には V2 の位置にこの形式が置かれている例が挙げられている。また、コーパスや歌でも V2 の位置に置かれる例が見られるので (例 2)、仮にこのグループに含めておく。dang は V2 に来的时候、否定辞が V2 の直前に置かれることもある (例 3)。

(例 1) dang tsun (dang 言う) 「言うことができる」(K2: 18)

(例 2) hí dang (数える dang) 「数えることができる」(コ)

(例 3) tsun ní dang (言う NEG dang) 「言うことができない」(歌)

[69] wam<勇敢さ> (=5.2.4[46])

「ある動作をする勇気がある」という意味を表す。動詞 wam 「勇気がある」に由来する。筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようである。

(例 1) wam shá (wam 食べる) 「食べる勇気がある」

(例 2) shá wam (食べる wam) 「食べる勇気がある」

[70] gwi<勇敢さ> (=5.2.4[45])

「ある動作をする勇気がある」という意味を表す。動詞 gwi 「勇気がある」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされている。確かに V2 の位置に来ることが多いようであるが、V1 の位置に来ることもある。なお、筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようである。

(例 1) gwi pru (gwi 出る) 「出る勇気がある」

(例 2) pru gwi (出る gwi) 「出る勇気がある」(K2: 17)

[71] chye<性質> (=5.2.8 [61])

V1 の位置に来たときは「能力がある」という意味を表し (例 1)、V2 の位置に来たときは「性質・習性がある」という意味を表すことが多いようである (例 2)。動詞 chye 「知る」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされているのだが、V1 の位置に来ることも多い。

(例 1) chye dùm (chye 弾く) 「(ピアノを)弾くことができる」(T188)

(例 2) pyaw chye (楽しい chye) 「(この人は)楽しい」(T133)

[72] lù<状況可能> (=5.2.8 [62])

状況可能などを表す。動詞 lù 「得る」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされているのだが、V1 の位置に来ることも多い。V1 に来たときは状況可能を表し (例 1)、V2 に来たときは性質を表すことが多いようであるが、まだはっきりしないことが多い (例 2)¹⁹。

(例 1) lù pyaw (lù 楽しい) 「(この人はお金があるから)楽しめる」

(例 2) pyaw lù (楽しい lù) 「(この人はお金はないかもしれないけれども)楽しい」

[73] mai<許可> (=5.2.3 [43])

許可や評価などを表す。動詞 mai 「よい」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされている。V1 に来たときと V2 に来たときとは意味の違いがあるようだが、まだはっきりとは分らない。

(例 1) n mai gínsúp (NEG mai 遊ぶ) 「(マッチで)遊んではいけない」(T168)

(例 2) rawng mai (持つ mai) 「(愛する心を)持つのがよい」(K2: 14)

[74] jàwʔ<受益> (=5.2.1 [25])

V1 の位置に来たときは使役を表し (例 1)、V2 の位置に来たときは受益を表す (例 2)。動詞 jàwʔ 「与える」に由来する。

(例 1) jàwʔ hí (jàwʔ 読む) 「読ませる」

(例 2) gǎlaw jàwʔ (する jàwʔ) 「してあげる」(K2: 40)

[75] htùm<最上> (=5.2.7 [60])

「最も～」という意味を表す。動詞 htùm 「終わる、なくなる」に由来する。実のところ、筆者のインフォーマントによると V1 の位置に置くことはできない。しかし、Hanson (1896: 38) や Hertz (1911: 12) には V1 の位置に置くこともできると記述されているので、仮にこのグループに含めておく。ただし、筆者がコーパスや雑誌などから集めた補助動詞 htùm の例 (312 例) のなかではこの形式が V1 の位置に置かれるという例は 1 例もなかった。

¹⁹ Matisoff (1991: 418–427) では、「得る」という意味を表す動詞が補助動詞のように用いられ、意味の違いをもたって V1 と V2 のどちらの位置にも現れうるというパターンを持つ言語が東南アジアの言語に広く見られるということを指摘し、ラフ語などの例を挙げている。

(例1) htùm gǎja (htùm よい) 「最もよい」 (Hertz 1911: 12)

(例2) gǎbà htùm (大きい htùm) 「最も大きい」 (K2: 9)

6 補文標識化

次の文は、ngú「言う」と shǎdù?「思う」が連続して現れており、動詞連続のように見える。

(22) jà mǎri na ngú shǎdù? ai (金 買う 未来 ngú 思う VA)

「金を買うのだろうと思った」 (KNO)

しかし、(22)の文を否定する場合、否定辞 í- を ngú に付加することはできない。

(23) jà mǎri na ngú í shǎdù? ai (金 買う 未来 ngú NEG 思う VA)

「金を買うのだろうと思わなかった」

このように、ngú には否定辞を付加することができないため、ngú は否定辞を前接できるという動詞の特徴を失って、補文標識に移行しているものと考えられる。そのことは、(24)のような ngú と動詞の間に主文の主語の名詞句が介在する例が見られることから明らかである。

(24) báí wà na ngú ngai myit t̃im (また 帰る 未来 ngú 私 思う けれども)

「また帰ってくるだろうと私は思ったけれども」(歌)

また、次の文では2つの ngú が並んで現れており、もしも両方とも「言う」という意味の動詞であるならば冗長的である。この文の最初の ngú も補文標識なのである。

(25) hkun ngú ngú ai (クン ngú 言う 関係節化) 「クンという(シャン族の藩侯の名前を)」(コ)

補文標識 ngú の後に来る動詞については、次のような動詞が来る例が見ついている。

(26)

tsun 「言う」 nga 「言う」 ngú 「言う」 shǎkr̃am 「あいさつする」 shǎlá 「冗談を言う」 mǎráwn 「叫ぶ」
jähtáu 「叫ぶ」 ngoi 「騒ぐ」 shǎdù? 「思う」 myit 「思う」 dúm 「思い出す」 myit yu 「考える」 dǎwdǎn 「決
定する」 myit dá 「決定する」 yáw shǎda 「計画する」 mying 「名づける」 shǎmying 「名づける」 ʔǎmying
jàw? 「名前を与える」 mǎsət 「記念する」 shǎgá 「呼ぶ」 shǎkàwn 「ほめる」 shǎgrau 「ほめる」 shǎmán
「祈る」 kyú hpyí 「祈る」 hpyí 「請い求める」 myit mǎda 「願う」 k̃am 「信じる」 k̃am shám 「信じる」 ht̃et
「命じる」 ʔǎm̃ing jàw? 「命じる」 sán 「尋ねる」 htán 「答える」 chỹe 「知る」 chỹe nà 「理解する」 hk̃am
lá 「認める」 myit hkr̃um 「同意する」 mù 「と見る」 yúpm̃ang mù 「夢に見る」 mǎdún 「示す」 k̃á 「書く」
shǎfín ya 「教える」 shǎgyeng 「口論する」

以上みたように *ngú* は補文標識への移行が完了しているのであるが、次の (27) のように単独で動詞として用いることもできる。また、この動詞は (28) のように *quotative* な用法で用いることもできる。

(27) *hpa hpé? ngú máyu ai rái ní* (何 NS *ngú* したい VA 疑問 疑問) 「何を言いたいのか」(コ)

(28) *nang mùng shá ù? ngú ai* (あなた も 食べる 命令 *ngú* VA)

「あなたも食べなさいと言った」(K3:9 一部変更)

Lord (1993: 180) によると、「言う」という動詞の補文標識への発展は、「言う」の *quotative* な用法を経て発展することが多い。ジンポー語の場合も、*ngú* は (28) のような *quotative* な用法を経て、補文標識へと発展したのかもしれない²⁰。ところで、ジンポー語には、*ngú* と同じく「言う」という意味を表し、音形も似ている *nga* 「言う」という動詞がある。そして、この *nga* にも *quotative* な用法がある。しかし、*nga* が補文標識として用いられることは少ないようである²¹。

7 まとめ

本稿では、ジンポー語の動詞連続の文法化として、副詞化と補助動詞化、補文標識化についてそれぞれ具体的に見た。また、否定辞の位置や名詞句の介在などの点を基準に副詞化と補文標識化の文法化の度合いを測ることを試みた。補助動詞については現時点で出来る限り意味の記述を詳しくし、また V1 と V2 の両方の位置に現れうるものがあるということも述べた。

略号

LOC: 場所格、NEG: 否定、NS: 非主語、PL: 複数、V: 動詞、VA: 動詞接辞

資料

(K1) (K2) (K3) 物語、(KNG) (KNO) (KT) ニュース、(MYU) 雑誌、(T) Thida Moe and Lillian Hka Nau (2006)、(歌) 歌、(映) 映画、(エ) 加藤 (1998) のジンポー語訳、(コ) コーパス、(チ) チャット

²⁰ 以上のような、補文標識が「言う」という動詞から歴史的に発展するということは、世界の言語に広く見られることである (Matisoff 1991: 398–399, Lord 1993: 151–213, Heine and Kuteva 2002: 261–265, Aikhenvald 2006: 32)。

²¹ 本稿で見てきたもの以外では、動詞連続を構成する一方の動詞が、側置詞や格に発展するということはよく知られている (Lord 1993)。ジンポー語ではこのような例はいまのところ確認されていない。ところで、次の文では *ngà* 「いる」と *gǎbà* 「大きい」という動詞が連続しており、*ngà* 「いる」は位置関係を示す後置詞のように用いられているようにも見える。

(例) *Duk Dang mǎre htà? ngà gǎbà wà ai* (Duk Dang 町 LOC いる 大きい なる VA)

「Duk Dang 町で育った」(KNG)

しかし、この文で位置関係を示しているのは場所格の *htà?* なのであって、この文から *htà?* を取り除くと不自然な文になるため、このような例を *ngà* の後置詞化であると考えすることはできない。この文を否定した場合、否定辞は *ngà* に付加されるため、この文において *ngà* は動詞であると考えられる。

参考文献

- Aikhenvald, A.Y. (2006) Serial Verb Constructions in Typological Perspective. In Aikhenvald, A.Y. and Dixon, R.M.W. (eds). *Serial verb constructions: a cross-linguistic typology*, pp. 1–68. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. (2000) A typology of causatives: form, syntax and meaning. In Dixon, R.M.W. and Aikhenvald, A.Y. (eds). *Changing valency: case studies in transitivity*, pp. 30–83. Oxford: Oxford University Press.
- Hanson, O. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hanson, O. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Heine, B. and T. Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hertz, H. F. (1895) *Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Superintendent Printing, Burma
- Hertz, H. F. (1911) *A Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Superintendent Printing, Burma
- Labya, Paul Naw Tawng (2009) *Jinghpaw hti ai laika level 1 (A)*. Myitkyina.
- Laika Uma (2009) *Jaw hkra hti, jaw hkra ka*. Myitkyina.
- Lord, C. (1993) *Historical change in serial verb constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Lungjung, Tu Raw (2002) *The Kachin to Kachin Dictionary. (Jinghpaw Ga Si Htai Laika.)* Myitkyina.
- Manam, H pang (1977) *English Kachin Burmese Dictionary. (Inglik Jinghpaw Myen Ga Htai Chyum.)* Myitkyina: Universal Literature Press.
- Matisoff, J. A. (1974) Verb Concatenation in Kachin. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 1 (1): 186–207.
- Matisoff, J. A. (1991) Areal and universal dimensions of grammatization in Lahu. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds). *Approaches to Grammaticalization*. Vol II, pp. 383–453. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Maran, L.R. and Clifton, J.R. (1976) The causative mechanism in Jinghpaw. In Shibatani, Masayoshi (eds). *Syntax and Semantics*, Vol. VI, *The grammar of causative constructions*, pp. 443–458. New York: Academic Press.
- Maran, Zau Tawng (2004) *Jinghpaw Wunpawng Laili Laika Ga Marun*. Myitkyina.
- Thida Moe and Lillian Hka Nau (2006) *Trilingual Illustrated Dictionary, English-Myanmar-Kachin*. Yangon: Pan Aung Publishing House.
- 加藤昌彦 (1998) 『エクスプレス ビルマ語』 東京: 白水社
- 加藤昌彦 (2005) 「ポー・カレン語の対句法 (parallelism)」 中山俊秀・塩原朝子 (編) 『記述研究から明らかになる文法の諸問題』 pp. 145–159. 東京: アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 早田輝洋 (1977) 「対語の音韻階層—なぜ「こっちあっち」と言わないか—」 『文学研究』 74: 123–152. 九州大学文学部.
- 戴慶厦・徐悉艱 (1992) 『景頗語語法』 北京: 中央民族学院出版社
- 徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦 (編) (1983) 『景漢辭典』 昆明: 雲南民族出版社